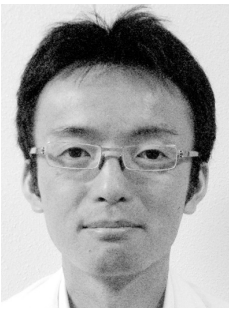
～砂田賞～



藤井　泰宏

略　　歴

昭和51年６月17日生
平成13年３月　岡山大学医学部卒業
平成21年３月　岡山大学大学院医歯薬学総合研究科修了
平成13年５月　岡山大学医学部附属病院　医員（研修医）
平成13年８月　国立岩国病院　外科研修医
平成15年８月　福山市民病院　心臓血管外科研修医
平成17年８月　岡山大学医学部・歯学部附属病院　心臓血管外科　医員
現在に至る

研究論文内容要旨

Damus-kaye-Stansel吻合（DKS吻合）は主肺動脈を上行大動脈に吻合し、左室流出路狭窄を解除する手術手技であり、特に複雑心奇形患者の左室流出路狭窄解除に有用である。しかしながら、術後の大動脈弁閉鎖不全症や肺動脈閉鎖不全症が報告されている。DKS吻合にはDouble-barrel DKS吻合とEnd-to-side DKS吻合という２つの吻合方法が存在するが、どちらを第一選択とすべきか議論のあるところである。当院のDKS吻合症例をまとめ、上記２種類の吻合法の術後成績について比較検討した。

対象は1993年６月から2008年８月までに当院にてDKS吻合を施行した複雑心奇形患者47例。手術時年齢中央値19ヶ月（０ヶ月～276ヶ月）。術前術後の大動脈弁もしくは肺動脈弁の逆流評価は小児循環器医の心エコーにて行った。End-to-side DKS吻合を13例に、Double-barrel DKS吻合を34例に施行した。術後の平均観察期間は71±50ヶ月（１ヶ月～188ヶ月）。４例の早期または遠隔期術後死亡を認めたが、いずれもDKS吻合を追加した事が原因の死亡では無かった。術後早期死亡した２例は術後の大動脈弁及び肺動脈弁逆流の評価は施行できなかった。術後肺動脈弁逆流の悪化を５例、大動脈弁逆流の悪化を２例で認めた。多変量解析にて、肺動脈弁逆流の悪化はEnd-to-side DKS症例でDouble-barrel DKS症例に比べて有意に高頻度であった（4/11 vs 1/34、単変量解析P<0.001、多変量解析P=0.023、OR=0.068、CI＝0.007～0.688）。すべての肺動脈弁および大動脈弁逆流の変化は術後早期より観察された。Double-barrel DKS吻合はEnd-to-side DKS吻合に比べて術後の肺動脈弁逆流の悪化を予防する点で優れた吻合方法である可能性が示唆された。